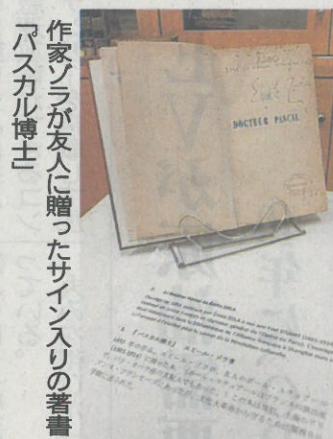


戦中の苦難越え続く交流

文化

関西日仏学館の90年を振り返ったシンポジウム
(京都市左京区アンスティチュ・フランセ関西)作家ゾラが友人に贈ったサイン入りの著書
パスカル博士

開され、手に取って見ることができる。展示図書は、フランスの作家エミール

関西日仏学館の90年を振り返る展示も行われている。戦後の1952年ごろに中國・上海のフランス機関から同館に送られたとみられる図書約4千冊の一部が公

開され、手に取って見ることができる。展示図書は、フランスの作家エミール・ゾラが友人に贈った手書きのサイン入りの著書「パスカル博士」など、上海アーリアンス・フランセーズの図書館から送られた貴重な本が並ぶ。今回の展示に合わせて初めて詳細に調べられたという。ジャン・ミシェル・ギヨン事務局長は「中国の内戦やその後の混乱を免れるためだつたとみられる」と話す。

隣接したドイツ文化研に戦時中、ナチスの旗が掲げられた様子を写真で伝える当時の新聞記事や、九条山時代の写真も展示されている。12日まで。入場無料。

ゾラのサイン入り著書など展示 12日まで

「京のフランス」として母国の語学や文化を伝えてきた京都市左京区の「関西日仏学館」(現アンスティチュ・フランセ関西)が10月で創立90周年を迎えた。記念して開かれたシンポジウムでは、フランス政府による語学学校として日本で初めて1927(昭和2)年に設立されて以来の歴史を関係者がたどった。京都大人文学研究所によって初めて行われた資料調査の成果や、戦時中に関係者が受けた苦難の記憶が掘り下げられた。(樺山聰)

関西日仏学館は当初、九条山(山科区)に建てられたが10年足らずで今の場所である京大前に移転した。ワッセルマン教授は「九条山は市内中心部から遠く、運営が先細り、別館の候補地を求めていた。ドイツ側も場所を探していたため、日本政府が4千平方㍍を2等分した」と

シンポジウムでは、資料調査を担当した立木康介人文研究教授による概説を受け、関西日仏学館の元館長のミッシェル・ワッセルマン立命館大学特任教授が「第2次世界大戦中の関西日仏学館」と題して講演。「駐日大使ボール・クローデルが京都での設立を提唱したのは世界でのドイツ文化の優位性に対抗する狙いだった」と指摘した。

関西日仏学館は、

山(山科区)に建てられたが10年足らずで今の場所である京大前に移転した。ワッセル

マン教授は「九条山は市内中

心部から遠く、運営が先細

り、別館の候補地を求めて

いた。ドイツ側も場所を探し

ていたため、日本政府が4

千平方㍍を2等分した」と

い」と述べた。

フランス国立極東学院のフ

ランソワ・ラシヨー教授は

「記録された記憶」と題して

語り、当時のフランス政府は、

文化的な意味では東京よりも

京都に重要人物がいるとの判断

して設立に至つたという見方

を示した。

自身も60年代に学館でフラン

西語を学んだという京大の

富永茂樹名誉教授は「当時の

交流が半世紀たつた今も続く

特異な空間」と位置づけ、意

義を語った。

独文化の優位性に対抗

説明した。

戦時の状況についてワッセルマン教授は、終戦直前に

逮捕された教師のオーシュコ

ルヌに70年代に会つたことが

あると明かし、「『獄中で仲間が飢えて次々としくなる

中、与えられた1個のおむすびを米1粒ずつつくり食べて生きながらえた』と聞いた。こうした先人の精神の強さがあつての今だと知つてほしい」と述べた。

フランソワ・ラシヨー教授は

「記録された記憶」と題して

語り、当時のフランス政府は、

京都に重要人物がいるとの判断

して設立に至つたという見方

を示した。

自身も60年代に学館でフラン

西語を学んだという京大の

富永茂樹名誉教授は「当時の

交流が半世紀たつた今も続く

特異な空間」と位置づけ、意

義を語った。

仏独の“深い溝”

「アルザス通り」

戦時中、隣接した関西日仏学館とドイツ文化研究所の間には敵対する本国同士の関係が影響し、「深い溝」があった。境界にある細い路地は当時、歴史的にドイツ領になつたりフランス領になつたりした地域になぞらえて「アルザス通り」と呼ばれたといふ。路地は今も残るが、ドイツ文化研は京大施設になっているため当時の面影はない。

講演でワッセルマン教授



戦時中、「アルザス通り」と呼ばれた路地。今は車も行き交う(左京区)

は「フランス側は隣のドイツ文化研より立派な建物を造つてみせると重厚な建築美を目指した」と、本国が対抗意識を強く持つていたことを示した。京大人文学研究所の調査からも、本国の「文化発信基地」であった双方が火花を散らしていた様子が浮き彫りになった。